

10 YEARS of MEMORIES

50周年以降に卒業した、17人の寄稿です。まだ色鮮やかなバドミントン部の思い出、その中で、歩み始めた社会生活に役立っていること、そして学生への熱いメッセージがつづられています。

本塾で築いた人脈は大切な財産 成果も残した4年間の体育会生活

平成5年卒 奥出 裕充

「十年一昔」と言うが、創部60周年記念誌の寄稿依頼を受け、月日が経ったことを痛切に感じる。自分が主将のときが創部50周年。当時は学生界最古の伝統を誇る本塾の威信にかけ、式典を控えた春季リーグで2部復帰を目指したが、力不足で3部1位に泣いたときだ。

OBの叱咤激励に奮い立ったし、主力の上級生が抜けた厳しい布陣で粘ったが、式典で本塾の歴史を築いた先輩たちの前で、胸を張って報告できなかったことは悔いとして残っている。

体育会生活は長いようで短かったが、あの4年間はいまの生活の支えになっている。

保谷高時代は東京都でベスト8が精いっぱい。一浪後、本塾に入ったが、バドミントンを始めたときからの「一度は全国大会に出てみたい」、頑張ればレギュラーに手が届くかもしれないという思いが、体育会入部の理由だった。

最初はインターハイ3位の諏訪さんら先輩のミスが少ないプレーに驚いたことを覚えている。当時の本塾らしいスタイルだったが、これに刺激を受け、何より身近な手本になった。身体能力や瞬発力があるわけでもなく、粘り続けるプレー以外に武器はなかったが、レベルが向上したのは本塾の伝統的な「根性練」の賜物だ。

体育会生活のハイライトは2年生の早慶戦ダブルスで全日本学生選手権2位の藤本選手を破り、最優秀選手賞を受賞したこと。後にも先にも藤本選手に勝ったのはこの1回だけ。早慶戦の連覇がかかっていたし、厳しい2対1の練習で培った技術や精神力、体力が大舞台で生きた。

初めてレギュラーで出場した2年生の春季2部リーグは緊張し、使ってくれた諏訪さんら先輩に迷惑をかけ続けた。最後の千葉商科大戦でチームは3-4の惜敗。3部との入れ替え戦に回ったが、このときに現在も全日本シニアなどで活躍する深尾選手のダブルスに勝ったことがその後の自信になった。

小豆沢体育館で3勝したこと、全日本学生で勝てたことはいい思い出になった。3年生で3部落ちし、その後も3部で停滞することに当事者としての責任も感じたが、インターハイ上位の選手が集まるような大学に進んでいたら、凡人の自分がこんな成果を残すことはなかっただろう。

2年の留年を経て、1995年からは共同通信社のスポーツ記者として働いている。バドミントンはもちろん、サッカーやプロ野球などを担当したが、現場で同業他社のバレーボール部OBやOGらにお世話になったことがある。バスケットボールのスーパーリーグに取材に行けば体育会同期の選手が活躍していたり、環境が変わっても体育会の間人間関係が絡むことが多い。本塾で築いた人脈は自分の大切な財産になっている。

就職活動などで影響を受けた日本バドミントン協会の石田純理事は某出版社に勤める明大OBであるが、亡父が本塾OBということもあり、いまでも後輩のように接してもらっている。名古屋支社時代に担当した名古屋グランパスの小宮好雄副社長は本塾かつての宿敵立教大OBの元全日本チャンピオンで、慶應のOBだと経歴を明かすと記者と取材対象の関係以上に親しくしていただいた。これも5大学OB戦などをも含め、先輩が受け継いできた交流の深さなのだろう。

OBの山本さんがサントリー監督時代に合宿などで指導を受けたが、そのときに宮村愛子さんと親しくなったため、妹の亜貴子さんとダブルスでアトランタ・オリンピック代表に決まったときは企画取材に快く応じてもらえた。各社が原稿を大きく扱ったことで、バドミントンのアピールにもなったはずだ。

自分の過ごしてきた世界と違う人たちと知り合ったことや酒席の礼儀などの大人としての社会常識も学べたこと。本塾の体育会に入部したことで大げさに言えば人生は一変した。バドミントンは細々と続けているが、記者としても携わることができる環境に感謝している。自分が記事として取り上げることで、育ててくれた関係者へ恩返しになるのだから。

独立独歩

平成6年卒 安達 憲瑞

振り返ると多くの方に助けられ、諸先輩、後輩、そして同期にも公私両面にわたってお世話になった。いろいろな光景が目につかび、その思いは尽きない。

3年目のシーズンが終わった平成4年秋、次期主将に任命された。当時、塾バドミントン部は3部首位、入れ替え戦を征し、2部に復帰するのが課題であった。

初めて3部に降格したのは平成3年春のリーグ戦。以降入れ替え戦に臨むものの、2部最下位チームにどうしても勝てないという状態が続いていた。

2部リーグ所属の大学はインターハイ経験者を揃え、当時の現状戦力を客観的に比較しても差があるように感じていた。自分をはじめ我々の代が部を引っ張ることとなり、同期でも事態打破のための策を話し合うこととなった。

話し合いのなかで出た意見は、短期間に力をつけるには効率的に練習をすべきというものだ。具体的には、基礎トレーニングを効果的に行うこと、集中してやる前提で練習時間を短縮すること、ショット練習についても必ず実戦的要素を加えながら行うこと、レギュラー陣は別メニューで練習することも検討すること、等があげられた。意見が分かれるものもあったが、とにかく実行に移してみるこ

ととなった。

効率性を重視するあまり全体的な練習量が低下しないように気をつけながら、トレーニングメニューの検討などについては副将の柳君にも協力してもらった。幾つかの新しい試みも行ったが、暗中模索の当時の状況では迷いもあり、なかなか目に見える成果が出ないことに対する焦りもあった。

次第に自分のなかでは、効率化ということと、基本的な練習をもっと地道に積み上げることも重要なのではないかという考えが交錯していった。決して努力を厭ったわけではないが、部を纏めることに気を取られ、明確な道筋を作ることができていなかったかもしれない。いずれにしても今思うことは、やり方は別にしても、もっと絶対的な量をこなす必要があったのではないかということだ。

当時は一人一人全員がなにをすべきかを考え、全員参加型でレベルの底上げを図ろうと思っていただけだが、それはある意味、自分が他に頼っていた部分でもあった。それが、知らず知らずどこかで甘えや妥協に繋がってしまったのではないだろうか。

今思えば暗中模索という経験は、このときが初めてだったかもしれない。周りに支えられながらも手探りで試行錯誤を繰り返したわけだが、この時の様々な思いは、4年間のなかでも一番印象深い。いろいろな出来事はどれも鮮明に覚えているが、一つのことを真剣に考えて悩んだことは決して無駄ではなかったと思う。

しかし1年という月日が過ぎ去るのは早いものだ。春のリーグ戦まではあまりにも短く、そして秋のリーグ戦もあつという間であった。結局最後まで求めていた結果を得ることはできなかったが、自分のなかではいろいろな意味で次に繋がったと思う。

「独立独歩」という言葉がある。他にたよらず自分の信じたことをやり通すことだ。暗中模索することは今でも多々あるが、最近はこの独立独歩の精神が大切だと感じている。何かの道を極めた人の話を読むと、やはり近道は無いことが分かる。確かに過程では迷いもあり試行錯誤のあとも見られるが、自分の信じたことをやり通し、想像を絶する努力を重ねてやっとそこに辿りつけるのだ。

社会人になった現在、目標や課題はいろいろと増えた。その一つ一つを自分のものにしていくためには、やはり人並み以上の努力が必要だ。目標が大きければ大きいほど、その積み重ねが不可欠であり、仮にはじめは結果が伴わなくとも、その成果は必ず何らかの形で次につながるはずである。これからも更なる難関が待っているとは思いますが、失敗を恐れず自分の力で信じた道を貫きたいと思う。

今私は北海道札幌市にいる。なにも無いところに道をつくり街をつくった開拓者の都市でもある。平成9年の北海道拓殖銀行破綻以来、北海道経済は回復の糸口さえ見えなまに暗闇のなかだが、決して街や人の活気までが消えたわけではない。知恵を絞り必死で頑張っている。前向きな考え方が根付いているのだろう。あと何年いられるかはわからないが、自分もここ北海道で独立独歩の精神で頑張りたい。

札幌に転勤し3年目となり、学生の練習風景をみる機会も少なくなったが、是非真剣に、厳しく、前向きに取り組んで貰いたいと思う。

最後に本記念誌への寄稿の機会を頂いたことを心から感謝するとともに、現役選手の益々の活躍を期待したい。

塾バドミントン部の思い出

平成6年卒 池田 淳一郎

創部60周年、心よりお祝い申し上げます。

記念誌への寄稿は大変光栄なことと思う反面、諸先輩方が残されてきた輝かしい歴史に新たな1ページを付け加えることができなかった私が寄稿なんてと戸惑いつつ振り返ってみたいと思う。

私は、リーグ戦にも慶早戦にもレギュラーとして出場したことはなく、4年間を通じ公式戦では関東学生選手権で僅か2勝しかできなかった。従って、胸を張って自慢できる戦績はないが、私が塾バドミントン部に何らか役に立てたかと思うのは、3年間のマネージャー（副務1年間、主務2年間）としての活動であり、私のかげがいのない財産である。

社会人生活も9年目を迎え、仕事の忙しさにかまけ、学生時代を思い出す時間も年々減ってきた気がするが、印象深い3つの思い出を取り上げたいと思う。

1. 最後のリーグ戦

私が2年生の春に創部以来初めて関東リーグ3部に落ち、入替戦へ駒を進めるものの復帰できずに4年生最後の秋リーグ戦を迎えた。

3部で優勝し、最後2部最下位の千葉商科大に勝てば復帰となる筈であったが結果的には勝つことはできなかった。

私達が4年生になった春、やはり2部上位校と練習することも必要だろうとその時点では一部昇格を狙っていた千葉商科大を選び練習試合をした。

まさかその相手と最後の入替戦を戦うことになろうとは思ってもよらず、予定を組んだマネージャーとして言葉には出さなかったが仲間を信じ吉と出ることを祈った。

安達を始めとする同期7人にその時の心境を聞いたことはないが、私の考え過ぎと思いつつも最後の試合会場（立川市柴崎市民体育館）の傍を通る度にこのことを思い出す。

2. 創部50周年記念式典

私も準備委員として参加させて頂き、あれから10年経ったのかと大変感慨深いものがある。

忙しい仕事の合間をぬって準備を進める先輩方に混じり仕事をさせて頂いたことは、大変勉強になったと同時に、諸先輩方がルーツ校として築かれてきた歴史の重みを実感しその一員として活動できることに誇りを持った。

久々に「50年史」を引っ張りだしてきて眺めてみると懐かしい写真が目飛び込んで来た。三田図書館は私が撮影したものであり、試合結果をまとめる作業に苦勞したことも今となっては良い思い出である。

当日の式典では、生まれて初めて口にした、ローストビーフとキャビアの味に感動したことも忘れられない思い出の一つである。

3. 岐阜県で森下監督、現役と再会

卒業後は、現役の練習相手にならないこともあり、記念館から次第に足が遠のいてしまった。その後99年に、初めて東京を離れ岐阜県に転勤となった。

普通ならば友人知人もいない寂しい生活となるはずだが、心強いことに合宿でお世話になった服部先輩と岐阜で再会、柳ヶ瀬を連れ歩いて頂いた。また、岐阜県で高校総体が開催されることを知り、学生に連絡をとり、激励会を開いた。岐阜では、久野、牧先輩(昭和33年卒)も駆けつけて下さり、また名古屋でも同様に中部地区のOBOGが多数集まり森下監督、学生を囲み楽しいひと時を過ごした。

3つの思い出を取り上げたが、共通しているのは、塾バドミントン部をキーとした人と人のつながりである。私は学生時代、本当に多くの人に出会い、一言では言い表せない位、本当にお世話になったと思う。

世代は違っても、会えば学生時代の苦労話慶早戦の話に花が咲く。そして学生の活躍を心待ちにしている。今思えば素晴らしい環境の中で活動できた事に感謝の念で一杯である。

しかし学生の時には気づかないことも多々あったように思う。従って今活躍されている学生の皆さんは、他にやるべきことがあるのではなかろうか等、悩む時が必ずあると思うが是非卒業まで続けて欲しいと思う。塾バドミントン部で活動して得たものは、人という財産に加え、初めて最後までやり遂げたという自信も得たことと思う。

バドミントンと縁のなかった私が、これらの貴重な経験を積み重ねることができたきっかけは、新入生のオリエンテーションで日吉校舎をぶらぶらと歩いている時に、前に立ち塞がって半ば強引、熱く語って勧誘して下さった諏訪先輩のおかげである。全てはあの出会いに始まったと思うのである。

平成6年 川南浩之



[H3 早慶戦]



[左:川南、右:五十嵐 於オーストラリア]

慶応のバドミントン部が初めて2部から3部に降格したのは、私が2年生の時の春リーグであった。その時は、2部リーグで1勝も出来ず惨敗を喫し、3部との入替戦でも青山学院相手にほぼ惨敗であった。その前の年は、春秋とも3部との入替戦に出場し、春は楽に勝てたが、秋においては辛くも

勝ち残った経緯があった。3 部落ちが決まった時にはついこの時が来てしまったかという感じであった。

周囲の大学がスポーツ推薦でインターハイ選手をどんどん集めていた中、当時の慶応のように一般受験だけで選手を集めて対抗して行くには、かなり無理が生じてきていたように感じていた。現在は慶応も藤沢の推薦で何人か入ってきているようだが、当時は藤沢キャンパスもできたばかりで、ほぼ全くと言っていいほどスポーツ推薦で入学させることが出来なかった。

3部降格後は、部員皆一丸となって2部復帰を目指し、練習に打ち込んだものであった。OBの方々からもいろいろと応援やプレッシャーをかけられ、常に2部復帰を念頭に置いて日々厳しい練習に取り組んだものであった。

そして3部でのリーグ戦に臨み、あらゆる点において2部との違いに気が付いた。会場が小豆沢でなくなったのはもちろん、各校の雰囲気や1日でやる試合数までも違うのである。小豆沢では1日1試合が当然であったが、3部では1日2試合を行うのである。2部の時は1試合でもとても長く感じ、ひどく疲れたものだったが、3部ともなると、相手のレベルも落ちるせいか、ラリーも短くなり、予想していたほど試合も長くならず、意外に楽に感じた。また、2部の頃にはあれだけ勝てなかったのが、3部では簡単に勝てたことも気持ち的に楽に感じさせたのかもしれない。3部に落ちてからはリーグ優勝は当たり前となり(2位になった時もあったが)毎年入替戦に出場した。そこで私が目にして気付いたことは、リーグ最下位となったチームが、かなりのプレッシャーを背負っているせいか、気合も充分で且つ必死であったため、実力が同じあるいは少しくらい優るチームが相手であれば気迫で勝ってしまうのであった。下から上がろうというチームも必死なのだろうが、それ以上のものを彼らは背負って来ている感じであった。入替戦には当然 1 部の最下位チームも出場しており、法政大学や中央大学、特に伝統校ともなると、特にそういう傾向が見られた。私が1年生の時の秋、慶応は入替戦で明治大学、国士舘大学と対戦し、あと一步の所まで追い詰められた。その時、部員一同負けを覚悟したに違いないと思う。だがそこから凄まじいほどの気迫、底力を見せ、見事に大逆転勝ちし、2部残留を決めたのであった。あれが入替戦ではなく普通の試合であつたら、あっさり負けていただろうなと思える。その時の我々慶応の執念はすごいものであったと今でも感じる。入替戦で勝ち上がるには、相当の実力の差がなければ、難しいものだなとつくづく感じた。

結局、私が引退するまで2部復帰は果たすことが出来なかった。昔1部でやって来られたOBの方々から言わせれば、全く不甲斐ないと感じるかもしれないが、いろいろな諸先輩方からいろいろと御声援や御指導を受けながら一生懸命頑張ったつもりであった。思うような成果が残せず多少悔いは残るが、常に目標を掲げ、それに向って頑張って来られたことはとても良かったと思う。

あの時以降、慶応は3部に定着してしまっているが、現役選手達には決して今の位置に甘んじて欲しくない。常に上を目指し頑張って取り組んで欲しいと思う。個人個人では、何かしら目標を持ってやっているとは思いますが、チームとしての目標を掲げることも大事であると思う。その結果自ずとチームがまとまり、個人の能力向上にも寄与し、チームと個人、両方の目標達成につながって行くはずである。

体育会生活において得たことと言えば、生活において常に目標を持って取り組んで行く姿勢で

あると思う。学生生活が自分なりに有意義に過ごせたのは、ひとつにはそのおかげであると感じている。私が社会人になってもう8年にもなるが、最近は何かしら目標を持って生活を送るようにしている。それは仕事において、私生活において、何でもいいのである。この先何十年、だらだらとした生活を送ったとしたら、年をとってから後悔しそうな気がする。

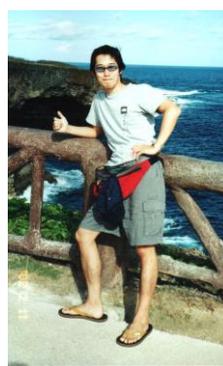
最後に、いろいろお世話になった諸先輩方には本当に感謝している。先輩方の支えがあってこの体育会生活であったとつくづく感じている。

10 YEARS of MEMORIES

平成7年卒 立田 祥章



[平成7年現役]



[現在]

私は1992年に慶応義塾大学バドミントン部に入部した。推薦入学ということもあって、春休みの3月頃に部の練習に初めて参加したのだが、非常にショックを受けたのを今でも覚えている。高校時代、上下関係もなく、だらけたムードで練習をしてきた私にとっては、あの軍隊式で上下関係の厳しい練習はとても異質なものに思えた。

1年生の頃は、雑用もうまくこなせず、いつも罰則を出され、「なんでこんなことせないかんのか」と思った。「実力だけがものをいう世界じゃないのか」と思って、先輩と試合をする時はなにがなんでも勝ってやろうとがむしやらになってやったものです。

飲み会の席においても、上下関係は厳しく、先輩より先に箸をつけてはいけないとか、コップの持ち方だとかいろいろと約束事があって慣れるのに苦労した。

今、社会人になってもそのくせが抜けなくて、友人からはいつも「なんでそんなに礼儀正しくやるの？」ってよく言われる。

結局のところ、いろんな意味で、バドミントン部時代に経験したいろいろなことが社会生活を営むうえで非常に役に立っているのだが……。

笑い話だが、こんなエピソードも覚えている。初めての練習参加の日だったろうか(まだ正式入部はしていない)、あるOBの結婚式の2次会があり、急遽、先輩の学ランを借りて出席したのだが、本格的に酒を飲んだのが初めてで、かなり酔っぱらったあげく二日酔いになり、次の日の練習

を休んだところ、当時の主将に「なってない、とりあえず顔を見せろ」と言われて、千鳥足で記念館まで歩いたことがある。あの時はなんて理不尽なんだと一方的に思ったものだ。

さて現役時代、いろいろなことが記憶に残っているおり、これが一番というのではないが、あえてもつとも記憶に残っていることと言えば、やはり4年の秋のリーグ戦である。1995年の秋リーグ戦、あの当時3部に低迷していた我が部としては、部内にも優秀な人材が多く、「2部昇格が一番近い、この時を逃すと2部昇格はいつになるのか分からない」と思っていたものである。

結果を言うと、当時主将であった私が2部との入替戦でシングルス・ダブルス両方とも落としてしまおうといういたらくで、部員みんなに非常に申し訳ないことをした。入社して2～3年の間はよく思い出していたし、今でもあの時の感覚は残っている。中学1年生の時からバドミントンを始めて10年、あの時ほどプレッシャーを感じたことはなく、また自分のプレーができなかったのも初めてだった。自分の体が思うとおりに動かなく、ラケットを持つ腕もまるで他人のような感じだった。信じられないミスを連発するのだ。とは言っても、結局、後で考えると、自分は所詮3部では勝てても、2部のレベルではないんだなと思ったのだが・・・。

あの入替戦の後、会社の内定式があったため、四国の高松に帰ったのだが、2次会の飲み会の席上、人事担当者が在席する中で、べろべろに酔っばらい、大きな声で泣いたのは今でも忘れられない。よく今の会社に入れたものだと思う。

今でもバドミントンは週1回ペースで練習をしている。頭の中では現役時代のプレーの感覚を覚えているのだが、実際にプレーしてみると体が動かない。最近では年を感じている・・・。

以上、簡単に現役時代を振り返ったが、今の私の人格を形成したほとんど全てはあのバドミントン部の4年間に集約されていたと思う。1年生当時はいやでいやでしょうがなかったが、今から考えてみれば、有意義な時間を過ごせてラッキーだったなと思う。

これからもバドミントンをこよなく愛していく。

シンガポールでのバドミントン

平成7年卒 藤澤 美和

「10年を振り返りつつ…」と言われても、私のバドミントン歴はそんなに長くはない。と思ったが、それはただの思い過ごしに過ぎなかった。高校1年から通算し、早14年バドミントンと接して来た。その間に私は大学生、社会人、そして妻となり、今、母となろうとしている。そんな私自身の変化と共に、バドミントンとの接し方もまた様変わりした。2年前から始まったシンガポールでの生活。今までは体育会や会社のクラブチームと言った、限られた環境でのバドミントンしかしてこなかったのが、このシンガポール生活のスタートと共に一変した。



[現役時代]



[現役時代]



[現在]

来星前から、シンガポールはバドミントンが盛んであろう事は予想していた。何しろ、隣国はインドネシア、マレーシア。またチャイニーズ系が国民の多くを占めているのだから。しかし、まさかここまで盛んだとは思わなかった。コミュニティーセンターや、地域の体育館に行くと、常にバドミントンのネットが張りっ放しになっている所がとても多い。そして、気の合う仲間達と一緒に時間借りでコート借りてシャトルを打っているのである。レベルは相対的にそれほど高くはないが、皆楽しそうにプレーしている。1年を通して気温、湿度共に高く、陽射はかなり強い。そしていつスクールが来るかわからない気候。そんな中で、室内でしかも小人数でも出来るバドミントンは彼等にとって手軽なスポーツなのだろう。

しかし、私には知合いがいる訳でもなく、また英語や中国語が流暢に話せる訳でもない。でもバドミントンは続けたい。そんな思いから、伝手は何も無かったがラケット片手に体育館へ赴いた。不思議な事に、思いは通じるものである。1ヶ月も経たないうちに、ローカルのバドミントンチームの練習に入れてもらえる事になった。チャイニーズ系のローカル男性ばかりのチームで、週2回、平日の朝、練習をしている。勿論彼らは仕事を持っている。日本では考えられないのだが、朝11:00からの出勤だったり、自分の会社だったりするものだから、8:00~10:00の練習は出勤前の一汗なのだ。始めはそんなチームに私が入って足手纏いではないか、また言葉も通じず、彼らに迷惑をかけてしまうのではないかと等、不安が付きまとった。しかし、心配は無用だった。私が体育館に行くと、皆笑顔で迎えてくれ、そしてストレッチをする暇も無く試合に入れられ、本当に時間いっぱいまでコートを離れさせてくれない。パワーも技術もチームの中では抜きん出て劣っている。でも、皆笑顔で迎えてくれるのだ。言葉の壁は未だに拭い去れないのは事実であるが、私は彼らの仲間になれたし、また彼らは私の仲間となった。バドミントンがなければ絶対に知合えなかった人達である。

社会人の時、全日本実業団の試合に参加した際、学生時代の知合いから、「あれ？マネージャーで来たの？」と言われた事がある。確かに学生時代の私の成績を考えたら、言われても仕方ない一言だった。しかも、私自身、社会人になってもバドミントンを続け、更にはそのような大きな大会に自分が出るとは思ってもいなかった。しかし、蓋を開けてみると、それなりにチームには必要とされていた(と自分では思っている)し、自分なりに月2~3回ではあるが練習は続けていた。自分でも本当に不思議である。

それがシンガポールに来た途端に週2回の練習となった。「下手の横好き」とは、私にとってのバドミントンの事を言う為にある言葉かもしれない、と、真剣に考えたりする。学生時代とは比較にならないほど少ない練習時間ではあるが、自分の中での充実感はかなり高いし、かなりのストレス発散となっている。

今は、学生時代や社会人の時の様に、リーグ戦などの試合がある訳ではない。特にシンガポールでは、日本のような「〇〇市民大会」といった試合もない。ちょっと物足りない気もするが、そのお蔭か、今までは「次の試合でもっと勝ちたい。」と思ってラケットを握ってきたが、シンガポールに来て純粋にバドミントンを楽しめている気がする。

大学時代、あれだけ汗を流したバドミントンなのに、女性は結婚、出産、子育てと、様々な理由でバドミントンから遠ざかってしまうケースがとても多い。こんな事を書いている私も、さて子供が産まれたらどれだけ続けていけるかは大いなる疑問である。しかし、バドミントンを通じて、本当に多くの人と巡り会い、そして多くの友情を得た。今まで、私が何度となくラケットを置こうと思った時、続ける橋渡しをして下さった多くの先輩、友人に感謝しつつ、これからも自分なりにバドミントンを続けていきたいと思っている。

平成8年卒 鈴木 浩樹

卒業して6年。大学に入学してから10年。早いものだ。
簡単に大学時代を振り返ってみよう。

1992年(平成4年)に藤沢の3期生として大学へ入学し、自分で選んだ学部での期待した授業を受けると共に、スポーツも充分にやりたいなと思い、サークル周りを始めた。高校からバドミントンを始めたこともあり、最初にバドミントンサークルへ行ってみた。サークルらしい雰囲気は何となく違う“気”を感じた。そこで、2つの選択肢が思い浮かぶ。1つは、やはり静岡人。サッカーはやるべきだ！と思い、サッカーサークル中心にやりたいときだけバドミントンにも顔を出す2つのサークル生活。2つ目が、やっぱり楽しくなり始めたバドミントンを本格的にやってみたいという思いから体育会である。どこかで話だけでも聞いてみるか。次に見つけた方をやってみようと思ふら歩いていると、目の前に学ランを着た集団(集団といっても数人だが。)がいた。これが何と体育会バドミントン部であった。こちらから声をかけ、話を聞いて見る事に。藤沢1期生の柳さんがいることに少し安心し、練習に行ってみる。基本を学んでいない私からすれば皆うまいなと思い、こんな中でうまくやりたいなと素直に思った。周りを見ると、同期らしき人間が数人いる。確かこの時は、三富・小林の塾高コンビに清水がいたと記憶している。

同期がいたこともあり、決めた通り、最初に出会ったバドミントン部に入ろうとひとまず決めた。

授業もおろそかにしたくないことと、藤沢から日吉に通うことから、結局平日は週2日の練習となり、土日を入れて週4日の練習。もう少し練習をしたいと思うことで、地元での練習にも積極的に参加することにもつながり、良かったと思う。今思えば、もっとやりたかったという気持ちが強いが。

大学時代のバドミントン漬けの生活を振り返ると、楽しかった思い出が次々と思い出される。

入部後、アルコールをあまり飲んだことがなく、何故か新入生歓迎会では飲めないと通し、コップ2杯のビールしか飲まなかったが、夏合宿以降はビールがなくてはならないものになっていた自分にも驚いている。1年の時の関東大学リーグ戦が終わった時にいきなり清水が退部し、夏合宿前に復帰したこと。また夏の千葉合宿では、旅館に雑巾を忘れ、罰則を出される覚悟をしながら練習を始めたこと。2年の大阪合宿。女子とは言え、実業団のしかもトップチームであるサントリー・三洋電機と練習・試合をやったこと。また1部リーグの筑波大へ泊りがけで練習に行き、強さだけでなくうまさをも身に付ける練習を知ったこと。早慶戦での出場枠を争い、一喜一憂したこと。日吉合宿では、連日の理工階段でのトレーニング、ボリュームがある食事、練習後の銭湯。一人暮らしの私にとっては、日吉合宿は電車での往復がない分合宿の方が楽だと感じたこともあった。リーグの打ち上げでの渋谷で朝までの飲み会。タクシーで横浜から一人暮らしをしていた大和へ帰ったことも何度かあった。

大学4年の夏合宿では、最終日の前日は寝ることができず、明るくなってから横になれたものの、最終日の午前中はまともに練習ができなかったこと。合宿はその時々、何かしら事件があり、楽しい思い出だ。

毎日の練習では、大学1・2年の時はコートにあまり入れず、入れるとすると女子との練習・ゲーム練習だけ。罰則が多くてもトレーニングの一つと考え、何とかコートに入るとの思いでひたすら努力した下級の時代。大学3・4年では、個人としてまたチームとしてリーグ戦でいかに3部優勝・2部昇格するかを考え、少しでも多く練習し、技術を身に付けようとバドミントンを生活の中心とした上級生の時代。

今となっては、非常にうらやましい生活だ。授業は好きなものだけ受講・出席し、その他の時間はバドミントンか、女の子のことを考えているだけ。無駄な時間もかなり過ごしているが、その時は十分に遊び、楽しんでいたと思える。

大学を卒業し、OBとなってからは自分たちも言われていたように、現役が少しでも強くなって欲しいという思いが強く、現役が甘いと考えてしまう。現役の時は、毎日が長いと思うことも何度もあったが、今となってはあつというまに過ぎてしまった良き思い出でしかない。

今でも会社で実業団としてバドミントンを続けているが、今年でバドミントン歴14年目に入った。ほぼ人生の半分にあたる。バドミントンをして得たことというよりも体育会で過ごしたことにより、社会に入れば当然とされる必要最低限の上下関係を身に付けたこと、各地に広がっているOBとの付き合い、特に学生時代に社会人の方と接したことは非常に大きいと感じている。

今でも同期のメンバーとは忘年会か新年会として毎年会っているが、これまでも様々な友人ができたが、やはりバドミントン部の同期は付き合いの深さが違う。大学時代は最も長い時間を過ごしたメンバーだからね。

また昔のメンバーで1週間程度、どこかでバドミントンだけの生活を送ってみたいものですね。2年に一度くらいでOB中心でやりませんか？

「入部当初の思い出」

平成9年卒 西村 浩生

私は、2年生になってから体育会バドミントン部に入部した。体育会の場合、普通は、高校生の時の競技経験者が、その実力を磨き、レギュラーとして活躍しようとして入部する人が多いのだろうが、私の場合、とにかく体力と根性を身につけたいというのが動機だった。バドミントンを選んだのは、ある程度は中学生の時に経験していたからである。

今、現役時代を振り返って一番印象に残っているのは、その入部当初の日々の事だ。入部した時の主将は4年生の立田さんだった。上のような動機で入部した私にとっては、自分の甘さを痛感させられる練習メニューと多くの叱責でもって迎えられた。

立田さんには、2・3回、どうしても練習をうまくこなすことができず、「やる気がないのならやめろ」と言われたことがあるのを覚えている。レギュラーを目指して、ハングリーに練習にとりくんでいる部員たちと、上のような動機で入部した私との間には、どこか練習に対する熱心さに差が出ていたのだろう。そのような甘い気持ちを覚まさせるような言葉だった。その度に段々と自主練習の時間を増やし、少しでも力をつけられるように努力するようになった。

「やめろ」と言われても、厚顔な私には、やめる気は全くおきなかったが、それでも少々落ち込んだことは確かだった。そんな時、一つ上の3年生の先輩方にはずいぶんと励ましを受けた。特に小林さんには、そのような時にはいつも何かと声をかけてもらったことを覚えている。ランニングになかなかついていけなかった私を走りながら励まして頂いた事も、大いに励みになった。

同級生であり、先輩でもあるという立場になる池内君は、私のあまりの素人ぶりにあきれながらも、バドミントン及び、部のルールについて色々教えてくれた。なんとなく、いつも忙しそうにしているので、あまり簡単に思えることを聞くのは気がひけた。それに時々機嫌が悪くなり、無愛想になった。しかし、結局、3年間通して、一番私のことで苦勞をかけたのは彼だった。

一緒に練習をした1年生の部員達は、高校での経験者で実力者が多かった。私が苦勞している練習メニューをしっかりとこなしているので、随分差があるものだと、感心している場合ではないが、感心してしまった。

どうにかこうにかやっているうちに、段々と練習や部のルールに慣れて来た。3年間で、バドミントンがどれだけわかったのかというと心許ないが、最初に意図していた、体力と根性以上のものが得られた。

まず、新しいことを学習することに抵抗が殆どなくなった。大学卒業後、大学院で、視覚障害について2年間学び、その後、ラビットという視覚障害者の使用する情報機器の販売や使用のサポートを行う会社に入社した。視覚障害学も、パソコンの扱いも殆ど初めてだったので学習初めの抵抗感は大きかった。しかし、集中して学習すれば、必ず一定の実力を身につけられることに疑いは持たなかった。現在、入社して3年経つが、どちらの分野についてもある程度の実力をつけられた。ある

分野で一流になるには、才能と、ある程度長い学習時間が必要だろうが、基礎的な力は短い期間に集中して学習しても形成できる。ある目的の達成に必要なだったら、新しい分野について基礎的な知識を得るための学習に抵抗感を持つ必要は無いという事を部活動から体得できた。

次に、途中参入者の気持ちが大分理解できるようになったのではないかと思う。正直、初心者として体育会のバドミントン部に入部したことで、肩身が狭く感じた。体育会は、いわばその競技の学生プロフェッショナルが集うところなのに、新参者として入るのだから当然である。例えば、人生半ばにして視力を失い、視覚障害者の世界に入る人の不安は、それを何倍にも増幅したようなものだろう。日常生活の勘や、白杖歩行、点字の読みの技術において、先天の視覚障害者に大きく遅れをとる。また、初めて音声パソコンにさわる人も、途中入社する者も、同じような不安を持つだろう。昨年年上の途中入社社員が2名あり、私が教える立場となったが、相手の気持ちがなんとなくわかる。一方、あんまり当然なことを聞かれると、もどかしい気持ちになり、入部当時一緒に練習した1年生はこんな気持ちだったのかと、一人頷く。こんな理解も部活動の経験があったからこそできる事と思っている。

残念ながら、視覚障害の世界に入ると、なかなかバドミントンをやる時間はとれない。プライベートの付き合いで一緒にできるのは、散歩や水泳、山登りなどになる。果して今後再開の機会が与えられるかどうか。10年後には「人工の眼」ができるというし。とにかく、次に何がおこるかわからない世の中を生きていくのには、部での経験はこれからも役に立っていくことだろう。

「怪我の功罪」

平成 10 年卒 川野武久

バドミントンという競技、本当に奥が深いということを最近つくづく実感させられる。社会人となった今でも趣味でバドミントンを続けているが、今でも自分が上手くなり続けている(決して「強く」なっているわけではなく、考えてプレーするようになったという意味で)気がするのは気のせいではないはずだ。いや、むしろ学生時代の自分がまだまだ未熟だったのだろう。当時の私はとにかく力で押すだけの選手で、相手の裏をかいてのプレーよりも、来ると分かっているにもかかわらず取れないような速いスマッシュで打ち抜くのを良しとするタイプであった。最近の私はといえば、後衛よりも前衛が好きで、スマッシュだけで押しまくるプレーよりも、いかに配球を読んで前衛で止めるかというプレーに興味をそそられるてしまうのであるが。

しかし今振り返れば、そんながむしゃらなプレーしか出来なかった自分も嫌いではない。そんながむしゃらさはプレー面だけにとどまらず、部活全体の練習方針やら雰囲気やらについても、同期や後輩、先輩にできえ、ストレートに熱く意見をぶつけていたことを記憶している。

時に仲間と衝突したり、理解しあえないことを嘆いたり、時に意見を共有できたことを大いに喜び合った当時の日々は、忘れられない大切な思い出である。

そんな濃密な大学4年間であったが、私にとっては特に後半2年間が前半2年間よりも、より充実していたと言える気がする。それは2年生の春にアキレス腱断裂という怪我を経験したからである。怪我というものは、もちろんしないに越したことはないが、その怪我をどのようにとらえ、将来の肥やしとすることができるかは本人次第だと私は考えている。確かにプレー面では大きく遅れをとったかもしれない。しかし私はこの怪我を通していくつものことに気づかされ、また再認識させられ、そしていくつものことを得ることができたと確信している。

まず、自分がバドミントンを大好きなのだということに気づかされた。怪我をして数ヶ月もプレーできなくなって初めて、それまでの毎日のように練習できていた自分がいかに恵まれていたのかを実感したし、きつい練習さえも懐かしく思えたのは不思議なものである。あの時にバドミントンを好きだという気持ちに気づいたからこそ、卒業後も趣味でバドミントンをやっているのだろう。

次に、より客観的に自分を分析できるようになった。怪我によって左足の筋力不足というハンデを負ったことで、逆に自分の強みは何なのか、強みを引き出し、弱みをカバーするにはどのようにプレーすればよいのかを必死に考えるようになったのである。同じスマッシュ主体のプレーでもそれまでの単にがむしゃらなプレーから、自分の得意球としてのスマッシュを活かす為のラリーの組み立てや、パートナーとの連携をもっと考えるようになった。

また、自分自身の意志が強くなった気がする。入院生活によって7kg以上体重が増えたのだが、これはまずいと思い、減量にとりくみ、10kgほど減らして結局怪我する前よりも少ない体重まで落とすことができた。また、当初復帰までは6ヶ月以上かかると医者に言われていたところを、3ヶ月後の早慶戦やリーグ戦にダブルスだけでも出場することができた時は、自分でも「やればできるんだ」と感じることができた。

そして何より自分で感じるのは、先にも述べたことと重なるが、この怪我を自分自身でプラスにとらえることができたというメンタル面での成長である。何事も機会ととらえ、将来の自分にとって、どのように役立てることができるのかというように考える「プラス志向」は、現在の仕事のみならず生活全般において大きく役立っていると言えると思う。

普通部からバドミントンを始めて大学まで合計10年間、塾バドミントン部に所属したことになるが、社会人となって4年が経とうとしている今でも、自分が最も帰属意識を抱く場所という、やはり塾バドミントン部ということになる。それはやはりその時代の自分の生活の中でのバドミントン部の占める割合が非常に高かったからであろうし、今の自分という人間を形作った場がそこであるからだろうと思う。現在の仕事や私生活において直面するさまざまな問題も、私は当時の部活での経験に置き換えて考えて判断することが少なくない。おそらくこれは今後も変わらないだろうし、是非そうしてゆきたいとも思う。プレースタイルは現役時代のがむしゃらさは消えても、心だけはあの頃のがむしゃらさを失わず、熱く生きて行きたいものである。貴重な経験をさせてくれた大学4年間、そしてあの怪我にも感謝したいと思う。

体育会バドミントン部の4年間

平成11年卒 坏 賢



[現役時]



[卒業時]



[現在]

社会人になり早3年が経った現在、大学での体育会生活は非常に懐かしく、且つ有意義な時代であったと感じている。

バドミントンというスポーツ自体を始めたのが高校2年の秋と遅かった自分にとって、大学の体育会バドミントン部に入ること自体、あらゆる面で大変だった。技術・実力面においても当然であるが、何と言っても体育会特有の厳しさやバドミントン部独自の規則・規定等には苦勞したので、とても深く印象に残っている。

私が大学1年生の頃は、その規則の為に、何かあるごとに罰則が出されていた。復唱を間違えたり、声(元気)が出ていなかったりすると、「大ウサギ(ジャンプ)1往復」といった今考えれば厳しすぎる規則が横行していた。その他、多くの理不尽な規則があったものの、その一つ一つが体育会バドミントン部という組織の秩序であり、辛かった反面、今になっては忍耐強い自分の精神を培ったものと感謝もしている。

なかなか大学に足を運べていない現状ではあるが、たまに顔を出すと、昔ほど上下関係を感じさせない和気藹々とした部員達がいる。時代には時代に即したやり方があり、それはそれで大いに結構なことである。

私の代は男子6名・女子1名だったが、入部当初はその倍はいた。しかし、1年も経たずに内情をある程度理解している塾高出身者を除く外部の人間の殆どが辞めていった。それ以降は、塾高と大学体育会の繋がりが薄くなったこともあり、塾高出身者の入部者はいない。塾高出身の私にとっては寂しいことであるが、それも体育会離れが進む時代の変遷の一つであると理解している。当バドミントン部に限らず、体育会特有の厳しさは現代の学生に即していないものなのであろう。

私はそうした時代の変遷の過渡期にいたので、最上級生時の部の運営には非常に苦勞した。部員確保の為の緩和と実力向上の為の厳しさの両立である。私の代は、一つ上の代が強かった為、試合経験も乏しく、何よりも実力不足であった。また、同時期に試合形式の変更(3複4単→2複3単)もあり、目立って強い選手のいなかった本塾は非常に苦戦を強いられることも予想された。そんな中、一つ下の代の男子もいなく、部の存続自体も危ぶまれた。強くなる為には練習自体厳しくするのは当然であり、かと言って、そうすることで新入部員確保が困難になってしまうのも事実であっ

た。歴代の先輩方が築いて下さった部のしきたりであるが、その一長一短を見極め、時代の流れを組み入れながら、うまく部を運営していくことは、偉そうなことを言うかもしれないが、一つの会社経営(マネージメント)であったように思え、今となっては貴重な経験をさせてもらったと感じている。

結局、戦績的には歴代最低のリーグ3部5位というOBの方々には大変申し訳ない結果を残してしまった。しかし、最低の目標でもあった3部残留が果たせたことで悔いはない。バドミントン経験の浅い私にとって、入部当初の先輩方々は実力的には雲の上の様な存在であった。もっと上を目指さなければいけないのだが、その先輩方々と同リーグで戦え、且つ後輩に同リーグで繋げたことは、何と言っても日々の練習の賜物であろう。

どうすれば強くなれるか、強くなる為にはどんな練習をしなければならないか、4年間はあっという間であったが、その中で本当に色々な練習をしたし、その度に試行錯誤した。目標を掲げ、その遂行の為には努力を惜しまない強い精神は、そんなバドミントン漬けの生活から身に付いたものだと確信している。

人生には、どんな形であれ、夢や目標がある。その中で、結果は確かに大事であるが、最も重要なのはそのプロセスである(プロセスなしに結果はついてこない)。そうした過程の中での物事への感じ方・考え方・取り組み方、つまりは自分の基本的な感性・信念を磨くことができたと思う。

これからは、社会人として、仕事に時間を割かれる日々が多くなり、自分を振り返る機会が少なくなりがちである。しかし、そんな時でも、体育会バドミントン部で培った確固たる自分の信念は、きっと揺るぎないものであろうし、多くの困難にも決して負けないものであると信じている。

塾バドミントン部60周年、本当におめでとうございませう。これからも多くの後輩を迎えるべく、一OBとして頑張っていきたいと思ひますので、今後とも宜しくお願ひ申し上げます。

慶応義塾体育会バドミントン部万歳！！

平成11年卒 三輪 敦



[現役時]



[現役時集合]



[現在]

社会人となり4年が経ったが、現役時代を振り返ると、バドミントンに明け暮れた4年間はあっという間だったように思ふ。当時は、毎日の厳しい練習で体も心も非常に辛かったのだが、今では、これからの人生では経験することのできない、何という楽しい時間を過ごしていたのかと思ひてならない。まだまだ社会人としては未熟であるが、今の自分を支えているものの多くの部分をこの4年間に

学んだように思う。記憶に残っている出来事は山ほどあるのだが、特に心に残っているのはやはり、リーグ戦、早慶戦、日々の練習である。

私がリーグ戦に単複兼ねたチームの主力選手として出場するようになったのは、4年生の春からである。すばらしい栄光の歴史を築いてきて頂いた先輩方には顔向けができないのだが、私の年のチームは決して強くなかった。リーグ戦では、4位、5位争いをしており、間違っても下位チームに星を落とせば屈辱の4部へ降格という位置で戦っていた。

副将であり、4年という責任の重い立場でありながら、なかなか勝てなくて情けない思いを経験した。リーグ前日は緊張でなかなか寝付けなかったこともよく覚えている。リーグについて言えば、勝利して喜んだ記憶よりも、むしろ負けて悔しい思いをした方が多かったかもしれない。

しかし、背中に「慶応義塾」という大学名を背負い、チームの代表としてコートに立った責任感や、1ポイントとるごとに会場が割れんばかりの声援を送ってくれ、ピンチでは声が潤れるほど応援してくれたチームの仲間との一体感は、この瞬間でしか味わえないものであり、生涯忘れることはない。

大勢の観衆が見守る中、独特のお祭りムード的な雰囲気の中で試合ができる早慶戦には、ピリピリと体中に電流が流れるような緊張感の中で戦うリーグとは異なる独特の楽しさがあった。早稲田にはインカレ上位に名を連ねる有名選手が多数在籍し、そういった選手に全力で挑戦し、自分のプレイがどこまで通用するのか試すことに喜びを感じたことを覚えている。

中でも、4年の時に戦った松本君(当時早稲田3年)との試合は忘れることができない。松本君はインターハイダブルス優勝、インカレでも上位に食い込む優秀な選手であった。試合は、1セット目13-15、2セット目16-17の接戦で負けはしたものの、自分がここまでできるようになったのかと大きな満足感を味わった(ここでは、松本君がどこまで本気だったかは考慮しないこととする)。1年生で出場した早慶戦では、数ポイントしかとれなかったのだが、4年間での自分の成長を実感できたゲームだった。

そして、もっとも体に染み付いて忘れられないのが、日々の練習である。入部当時は、練習前のアップと称して行われるランニングの距離に驚いた。走っただけで、へばってしまいその後の練習に全くついていけなかった情けない思いをしたことが懐かしい。

とにかくリーグで勝つことを目標に日々の練習に励んでいたのだが、副将というチームを引っ張る立場にありながら、なかなか思うような結果が出せなくて悩んだ。森下監督や諏訪コーチをはじめ、OBの方々の厳しくも暖かい指導に応えることができなく、申し訳ないという気持ちが大きかった。これ以上、上達しないのかとか、センスがないのかなどいろいろと考えたりもしたが、練習に打ち込むことでそういった悩みを打ち消してきたように思う。

思い出すと切りがないのだが、楽しいこと、辛いことが昨日のこのように次々と蘇ってくる。

バドミントンに打ち込んだ4年間は、ただ楽しいのでもなく、ただ辛いのでもなく、勝つ喜び、負ける悔しさ、努力することの大切さなど、そこから数え切れないほどの多くのことを学び、また、それが現在の自分の支えとなり、将来の自分の支えになっていくと確信している。

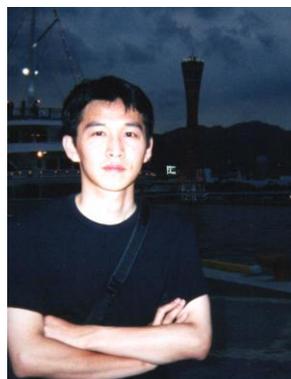
すばらしい先輩、後輩、そして同期に囲まれながら大好きなバドミントンに熱中できた4年間は至福の時であった。

これからも、このすばらしいバドミントン部がさらに繁栄し続けることを祈っている。

平成11年卒 岸本 真一



[卒業旅行:左前から岸本、坏、手島、三輪]



[現在:於神戸]

今から 10 年前……。それは私にとって慶應義塾高校に入学した年である。

私は小学生の頃、地元のサッカークラブに所属しており、スポーツは特に球技が好きだった。そのため、体育系のクラブに入部しようと考えた。そして、バドミントン部を選んだ。一からスタートが切れること、週休 2 日制だったことが理由だ。慶應らしい厳しい上下関係に理不尽さ、戸惑いを覚えた事がしばしばあった。時には先輩を憎らしくも思った。

そして 3 年後、大学に入学した。大学生活 4 年間は人生最後の楽園生活である。女子大生との提携サークルで青春を謳歌することを夢みていた。しかし、附属高校で 3 年間を過ごしていたこともあり、大学生活で一つの事を成し遂げたいと考えた。資格試験などの勉強をする気にもなれず、体育会に入部し、精神的にも成長しようと考えた。

92 年 4 月、正式に体育会に入部した。高校以上に厳しい規律と、何より先輩が多かったのが嫌だった。また、他の学生が遊んでいるのを横目に練習していることが嫌になる事もあった。しかし私は、何があっても辞めないつもりだった。逆に、他の多くの人とは違った生活を送っている。何より目的を持った生活を送れているという満足感があった。ただステータスで部活をするのは何の意味もないが、良い意味でのプライドや精神的な強さを身につけられるようになっていたと思う。

さて、具体的な練習の中での印象深い出来事を振り返ってみる。やはり、暑い夏の練習はきつかった。あんなに水がおいしいと思った事は初めてであった。ランニングは得意であったが、記念館の前のロータリーダッシュは、かなりきつかったことを今でも覚えている。全速力で走ると足がつりそうになった。体力の限界を感じた。また、記念館の裏の階段ダッシュも強烈だった。今もう一度やる勇気はない。あの経験は、人生において非常に貴重なものになったと思う。

そして競技以外の点では、3 年生の時に早慶戦実行委員を経験した事が印象深い。最初は嫌だなと思ったが、これも非常に貴重な経験である。段取りを決めたり、印刷物などの業者と折衝したりした。まだ社会経験も無く、何も知らない自分が考え、行動した事は本当に良かったと思う。このことは、将来もっと後で実感できれば幸せである。実行委員をやって何が良かったかと言え

ば、自分が率先して動き、物事を決めていたことである。もちろん責任はあるが、少なくとも早慶戦に関しては自分が決めた事が影響し、動かしているという実感があつた。ただ自分がやりたいようにやる事は簡単かもしれない。しかしそれでは、やりがいはない。周りの人に喜んでもらえた時が何よりも嬉しいと思つた。逆に言えば、どうすればみんなに感謝され、評価されるか。多少、ずるく聞こえるが、これが究極なのでは、とも思つた。

本題のバドミントン競技では、諸先輩方には及びもせず、恥ずかしい限りであるが、現在私は所属会社でもバドミントンを続けている。年に2回、東京都実業団の最下位リーグに参加している。練習も月に1回程度である。しかし、大学のバドミントン部の諸先輩方を始めとして、目上の方と交流が保てるのも、またバドミントンを続けてきたからである。年齢に関係なく、同じ趣味を共有できる事の素晴らしさを最近改めて感じている。

「慶應の良さは、卒業してからわかる」とよく聞かされた。実際、社会人生活が3年を過ぎようとしている今、解かってきた気がする。仲間意識が強い、そして連帯感がある証拠なのである。それを実感出来る事は本当に幸せだと思ふ。

繰り返しになるが、私は慶應義塾そして体育会で学生生活を送り、精神的にも肉体的にも鍛えることができた。そして何より、日吉に足を運んだ時に思い出があることが嬉しいと同時に誇りに思ふ。いつか、子供ができたなら話をしてあげたいと思ふ。そしてこの気持ちを忘れず、辛いことがあつた時の「心の糧」にしたい。慶應義塾そしてバドミントン部永遠なり。

体育会バドミントン部時代を振り返って

平成11年卒 手島 洋一

慶應義塾バドミントン部創立60周年、おめでとうございます。永き良き歴史を持つ、体育会バドミントン部の部員として大学生活が送れたことを改めて嬉しく思ふ次第です。

私は高校3年の冬、ふとしたきっかけでヨネックスジャパンオープンを観戦しに、駒沢体育館に足を運んだ。体育館に入ると、現NTT東日本の大田・竹鼻、片山・久保田等が外国人選手を相手に試合をしていた。この時が私にとって初めてのバドミントンであつたこともあり、想像をはるかに超えた世界トップレベルのプレーに大きく感激したのを今でもよく覚えている。 [平成10年6月上旬]



この強烈な経験がきっかけとなり私は大学でバドミントンサークルに入った。練習は週2回、わずか2コートに20人以上の部員という環境で、半年間頑張ってきたが、なかなか思うように上達することができなかつた。スポーツに本気で打ち込めるのは時間的にも肉体的にも大学までであろうと考え、体育会でやってみたいと仲間や先輩に相談したところ、体育会というのは経験者でも辛くて

続かないといわれているから止めておけと皆に反対された。しかし 2 ヶ月ほど悩んだ結果、当たって砕けるの覚悟で学年末試験終了後、体育会の門をたたくこととなった。

体育会では入部初日からコートに入ることができたが、基礎打の相手をしてくれた先輩の技術の高さ、ロータリーダッシュを次々にこなしていくスタミナ、復唱系の号令など、驚きと戸惑いの連続であった。

激しい練習にもどうにか慣れてきた頃、新入部員も4名入部し、春季リーグ戦を迎えた。普段一緒に練習している先輩方が、圧倒的な強さで 3 部リーグを勝ち上がる姿を見て、体育会バドミントン部のすごさを初めて実感することができた。特に大越・石塚VS日大経済、中澤・堺(敬称略)のダブルスは強く印象に残っている。

春季リーグ後まもなくして男子部員は全員退部してしまったが、女子部員が 2 名残ってくれた。当時、厳しい練習や雑用が辛くて何度も辞めてしまいたいと考えた。しかし同期の山本を含めて 3 人の女子部員が同じ練習メニューをこなしているのを見て、ここで辞めたら本当の根性無しになってしまうと思い、頑張ることができた。

秋になると東日本学生バドミントン選手権に部員全員で参加したが、自分が試合に出ることよりも、学生トップレベルの試合を間近で見られるのが楽しみだったような気がする。また東日本は遠征試合であったが、参加大学が皆同じホテルに宿泊するなど、合宿とは異なる独特の雰囲気があり、毎年参加するのが楽しみであった。

入部以来 2 回目の春が来て、新入部員が5名程入部してきたが、やはり男子部員が 4 人全員退部してしまった。そんな環境であったが、同期は 6 名と多く、上級生である 4 年生も上手な方が多かったので、練習はとても充実したものであった。その頃になるとようやく私もバドミントンらしいバドミントンができるようになってきて、また新しい楽しさを感じられるようになった。他校を記念館に招いての練習試合などでもゲームに参加できる機会が増えてきて、どうやったら上手になるのかというよりも、どうしたら勝てるようになるのかなんて事を考えるようになったのもこの頃だったと思う。

上級生が引退され、自分たちが最上級生になったころから森下監督、諏訪コーチをはじめ様々なOBの方々から直接ご指導いただくことが増えた。上級生が抜け戦力が大幅にダウンしたのは明らかであったが、新主将である坏君のもと練習方法も工夫しながら、一人一人が危機感を感じて、部員一丸となつての練習ができるようになったと思う。翌年の春リーグから3複4単にかわって2復3単となり、長年の憧れであったリーグのメンバーに入ることはできなかったが、3部残留をかけて必死に戦っている仲間達の試合に先輩方の試合とはまた違った感動を味わうことができた。

体育会バドミントン部に入部したのは迷いに迷った末の決断であったが、間違いなく正しい決断だったと確信している。大学時代というのは、自由に時間を使うことができる、人生でも数少ない期間である。しかし一つの事を徹底的にやり遂げる経験とその感動は、普通の大学生活ではなかなか得られないことだと思う。また体育会で厳しい練習を共にしたことで、同期の仲間達や先輩方、後輩達とも良い関係が築けたと思っている。これが私にとって一番の財産である。

社会人生活3年目が終わろうとしている現在、週に1、2回程バドミントンをしているが、これがな

なかなかいい気分転換になっている。社会人になってからバドミントンを始める人も多いが、学生時代にある程度一生懸命やっていると余裕をもって楽しむことができるようだ。これからは記念館にも積極的に足を運んでいきたいと考えている。

最後になりましたが、慶應義塾体育会バドミントン部の益々の発展と、皆様のご健勝を祈念して結びとさせていただきます。

60周年記念誌寄稿文

平成 12 年卒 米谷 香里

創部 60 周年おめでとうございます。50 周年は私が女子高に入学する 1 年前でしたので、私がこうした節目の年を部の関係者として迎えるのは、今回が初めてとなります。

私は女子高バドミントン部入部と共にバドミントンを始めました。高校時代は 1 日 3 時間弱の練習を週 2 回程度しか行えなかったため、なかなか上達できず、少々物足りなく思っていました。試合前には外の体育館で自主練習を行うなどしていましたが、遠距離通学の大変さからそれもあまり続きませんでした。そのため「もっと集中して練習したいなあ」と常に思っていたように記憶しています。

女子高 3 年生の時、1 年上の先輩であった山本さん(平成 11 年卒)が体育会バドミントン部に入部され、当時はインハイ上位の女子部員が 2 名いたこともあり、春リーグで女子が圧倒的な強さで 3 部に昇格しました。その時私は試合のお手伝いを兼ねて観戦しており、このような強い先輩の下で一から練習をし直したいと強く思い、大学に入学したら、体育会に入部しようと漠然と

考え始めました。



大学の入学式の翌日、入部をためらっていた同期の(旧姓)須賀(平成 12 年卒)を無理に連れて練習に参加しました。その時には山本さんと 4 年生 1 名を除いて、女子は退部してしまっており、大勢の男子に混じってコートに入れてもらい、恐る恐るノックに参加しました。試合前の調整であったにも関わらず、大したトレーニングもせずに引退後の日々を過ごしていた身には非常にきつく、このような環境で続けていけるのだろうかという不安が 1 日にして現実のものとなってしまいました。しかし私達が入らなければ女子はリーグにも出られないという状態で、女子高時代からお世話になった山本さんの存在もあり、須賀と 2 人で入部を決めました。1 ヶ月後に迎えた初試合、春季リーグ戦では全く役に立わず、4 部降格となりました。

リーグ戦終了後から厳しい練習が始まりました。とにかく体力のなかった私には毎日の練習が地獄のようで、高校時代の前向きな考えもどこかへ消えてしまい、毎日やめることばかり考えていました。夏前まで同期の男子が 2~3 名いましたが、彼らも少しずついなくなってしまう、最終的には女子 2 名だけの代となりました。創部以来、男子部員のいない代は私達が初めてです。その点での

苦勞もいろいろと多かったのですが、私が4年間で最も辛かったのはこの年の秋のリーグ戦です。春にはダブルスを組んでいた4年生の女子が夏の長期休暇中に退部してしまい、秋リーグは女子3名で迎える形となりました。当然団体戦には人数が足りず、サークル等外部から一時的に借りる予定でしたが、手違いにより人数が揃わず、ほとんどの試合を棄権することになってしまいました。どうにかならないものかと直前まで調整を続けていたのですが、棄権を決定した時、入部以来、初めて部員の前で泣きました。大学に入ってからまだ半年も経っていませんでしたが、それまでの苦勞が水の泡になったような気がしてなりません。この秋リーグまでの5ヶ月間、「次の試合が終わったらやめよう」と心のどこかで考えていたのですが、こんなに弱い自分でもやめたら他の部員が試合に出場できなくなり、ポイントを落とす以上に迷惑をかけることになるのだ、と考えを改め、がんばって続けてみようと思いました。

その後も練習が楽になったわけではありませんでしたが、2年生になってから強い後輩が入ってきたことで、1年生の頃よりも気負わずに練習に取り組めるようになりました。2、3年生の2年間、女子部はこの4名だけで戦ってきました。自分の弱さ、意識の低さに自己嫌悪に陥ることも少なくありませんでしたが、それでも毎日記念館で練習を続けることができたのは、他の部員、特に女子の存在が非常に大きかったように思います。この4名は結局4年間の現役生活を全うしました。女子はいつの時代も慢性的な入部者の不足に加え、途中でやめてしまう者も多かったのですが、この頃から(と言ってもこれ以降の入部者は今でも現役ですが)退部者が減ったように思います。全体的な組織・体勢の変化が大きな理由だと考えられますが、私達がかんばった結果が少しは生きているのかな、とも思います。しかしまだまだ選手層の薄さは否めません。男子にも近年同様の傾向が見られますが、自分が強くなること以上に部全体に常に気を配り、欠けているものを客観的に認識して、より人を集められる魅力的な部にしてほしいと思います。特に女子は、私達が現役時代に達成することができなかった2部復帰に向けて、女子のための練習を増やすべきです。そのために、より部員を増やして女子だけで練習できる基盤を作って欲しいと思います。

最後に、現役女子とOGとの関わりについて述べさせていただきます。私が現役の頃から、大澤さん(昭和35年卒)を中心としたOGの方々女子の試合の応援に駆けつけて下さったり、年に1回お食事会を開催して下さっています。卒業後、特に女子は現役との接点がほとんどなくなってしまう方が多いように思っていたのですが、近年こうした活動を通して応援して下さる先輩方が増え、とても嬉しく思います。私も現役時代の苦勞、嬉しかったこと、お世話になったことを忘れず、いつも遠くから現役を応援し続けられるOGでありたいと思っています。

初めての慶早戦

平成13年度卒 岩部 直子

慶應義塾バドミントン部の60周年という長い歴史のうちの4年間を、私自身が現役時代

の仲間とともに時を重ね、歴史を創りあげた一員であることをうれしく思う。

その貴重な 4 年間で強く心に残っているのは、1997 年に行われた第 45 回慶早戦である。私にとって初めて体験する慶早戦であったし、慶應義塾バドミントン部の歴史の重さを感じることができたのもこの定期戦だった。



第 45 回慶早戦。その日が近づくにつれ、先輩方のゲーム練習にはピリピリとした緊張感が高まっていき、できるだけ審判には付きたくないと思わせる迫力があつた。しかし、私にはそれがとても不思議な光景にうつった。当時も我が部は男女ともに 3 部。対戦相手である早稲田は男女ともに 1 部。到底かなうはずのない相手になぜこれほどまでに真剣になれるのかと、不思議でしうがなかつた。

当時 1 年生であつた私は、試合に出て勝つことよりも、慶早戦を無事におわらせることの方に力を注いでいた。1 年生としての仕事が完璧にできなければ、あとですさまじい量のトレーニングが待っているとされていたからだ。慶早戦の当日までに声出しや体操、アップから試合に入るまでの流れを頭と体にたたき込んだ。

慶早戦当日、まず、驚いたのは続々と登場する OB・OG の数であつた。私が慶應義塾バドミントン部に入部して非常に驚いたことは、週末には頻繁に日吉記念館に足を運んで現役の練習相手をし、試合結果や成長ぶりを気にかけて下さる OB・OG の存在であつた。しかし、慶早戦ではそれを上回る数の OB・OG の方々が参加され、慶應義塾バドミントン部の縦のつながりの強さと歴史の深さを知ることができた。また、OB 戦では華麗な技に魅せられ、試合の流れの駆け引きや、シャトルの運び方など学ぶことが多かつた。

現役戦を目前にして、いよいよアップが始まつた。すでにアップから早稲田との勝負が始まつているといわんばかりに、両大学の気合いの入つた声か体育館に響き渡り、緊張感もより一層高まつていった。その雰囲気か圧倒されながらも、何とか 1 年生の役割をこなしてアップを終えた私は、もう慶早戦が終つたかのような安堵の中かいた。私の中での気持ちの高まりか冷め始めた時、現役戦に突入した。

女子の試合が始まるまでの間、男子先輩方の試合を観戦し、応援した。そこには、現役最後の慶早戦を最高のプレイで飾ろうとする 4 年生、互角の相手に何とかポイントを取り、チームの勝利に貢献しようとする 3 年生の姿があつた。リーグ戦以上にチームの総力が問われる慶早戦。リーグでは格上の大学でも、総力戦は未知の世界だ。異様な雰囲気の中、何が起ころかわからないのが慶早戦なのだか強く感じた。

男子先輩方の熱戦に感化され、再び私の中か、気持ちの高まりか戻つてきた。ほどよい緊張感の中、ダブルスに臨んだ。しかし、気持ちとプレイは空回りするばかり、あつという間に試合は終つてしまった。気持ちを切り替えたシングルス。2 年生の稲村さんとの対戦だつた。実績からいつても大きな差があつたが、心を動かされたこの定期戦で何かを残したいという思いが強くあつた。

その試合は、一本一本のラリーが長く、苦しくて苦しくて、あきらめてしまいそうになる弱い心との戦いだった。1 セット目を先取したことで挑戦者だったはずが突然追われる立場になり、変なプレッシャーを感じたりもした。華麗な技もなにもない、その時その時に打てる限界のストロークを出すだけの試合だった。それでも、先輩・OB・OGの方々の応援はしっかり聞こえてきたし、応援指導部のタイミングをつかみかねながらの声援もうれしかった。

ファイナルゲームでやっと勝負がついた。勝った！ただただ、うれしかった。声援に応えられたことも、敢闘賞をいただけたのももちろんうれしかったが、慶早戦パンフレットに名前が残ることより、他の何よりも、自分にとって忘れられない一日になったことが最高にうれしかった。

仕事に就いてまだ1年。あの日のことをまだまだ鮮明に覚えているのは当然のことかもしれない。しかし、これから先何年経とうと、あの日がずっと色褪せずに私の中に存在し続けるであろう。いろいろな感情が生まれた1997年の第45回慶早戦は私の人生の大切な財産である。

リーグで勝つ!!!

平成14年卒 三壁 敏隆

1年の秋リーグ、これが僕の部活生活の出発点である。4年生最後の試合の脇で、第3シングルスにメンバーチェンジで出られたのだ。相手は日本経済大学の原田。3部でもっとも弱いレベルではあるが力足らず(8, 8)で敗れてしまった。しかし僕にとってこれは出られたこと以上の意味がある。

部は危機的状況に近かった。3部5位のままチームの主力4年生は引退し、3年生はおらず、来年の春リーグは1、2年生で戦わなければいけない。まだ少しでも通用するのはAO入試ではいった同期の辻くらい。決定した対戦校をみると勝てそうなのは唯一日本経済大学だけで、負ければ部始まって以来の4部との入れ替え戦に出ることが予想された。このような状況の中さらにオーダーを考えると、チームの勝利は最後の第3シングルスでの僕と原田の勝負で決まる可能性が高い。突然降って湧いてきたような重責に体がふるえた。しかしまだ半年ある、僕が勝てばチームを救ったといえる!!!しかも相手は戦ったことのある原

田だ!幸運にも僕がキーマンになれ、最高の目標ができた。



バドミントン生活初めての具体的な目標を得て、いつも打倒原田を考え練習した。(8, 8)で、しかも体力負けているので勝つために彼より練習しなければいけないことを痛切に感じていた。週2回のオフの時の授業の合間にウェイトをはじめたり、OBに積極的にアプローチし、小柳さん、草場さん、井端さんなどのかたがたにどんどんシングルスの相手をしてもらい、同期でバドミントンの実績を持つ辻のフットワークを真似た。帰りの駅のホームの上り階段がものすごく長く感じ、よく興奮して寝られなかった。

やればやるほど自分がまだまだぜんぜんだめだとわかる。2年の4月に会長杯Bという試合があり、部全員で出て、結果僕は一回戦負け、同期の辻は準優勝だった。試合を見ながらセンスの違い、基礎体力の違いをまざまざと見てへこんだ。しかしあまりへこたれている暇はなく来るリーグに向けて練習に励むしかない。そのうちに、差が分かった分いつか倒そうと差を縮める気になった。

あっという間に秋リーグから半年が経ち、僕らだけで戦う春リーグがきた。AO入試で田添が入ってきたとはいえ勝てそうなのは日本経済大学だけなのは変わらない。初日にその日はやってきた。予想通り2-2で最後のシングルスが僕に回ってきて、チームの勝利をかけ原田と半年ぶりの対戦だ。部のベンチは皆不安そうに見つめる。試合直前まで不安でいっぱいだったが、打倒原田を念頭に半年練習をしてきたんだ、やるしかないと開き直り試合に臨んだ。ほどよい緊張感、気持ちの高まりのなか試合が始まり、1セット目は何とか取れ、2セット目の10オールくらいでサービスオーバーが何回も続いた。ここが試合の山だった。相手が決めたと思ったショットを食らいつきラリーをとり、流れは完全に僕のところにきた。その2,3歩のために半年練習してきたように感じた。それからは5連続ポイントで勝利を勝ち取り、ベンチは辻をはじめ皆大喜びで抱き合って喜んだ。最高にうれしかった。あの瞬間は忘れられない。目標に向かって打ち込むことの素晴らしさを学んだ。

この2年の春リーグが僕の部活生活を決めた。リーグが僕のすべてになった。幸運にも弱い僕がレギュラーとして大学を代表して試合に出られる、さまざまな強い相手と試合ができ経験を積める、僕がキーパーソンである、自分の勝利を皆が喜んでくれる、これはすばらしい環境だ。リーグは練習の成果を出す晴れ舞台上、見に来てくれたOBに自分がやってきたことを伝える場だった。目標の相手に勝てた時は最高にうれしい。頭の中はリーグで埋まっていった。個人戦はリーグのための経験ぐらいにしか思わなくなっていた。部誌やOBへの年賀状には「リーグで勝つ」「だれそれに勝つ」などとよく書いた。幸か不幸か、ずば抜けて強い推薦入学者がなかったので4年の秋リーグまでレギュラーでありつづけられた。当初2年の新人戦で辞めて勉強すると恥ずかしながら公言していたが、完全に部活にはまった。

強くなりたくて部に入り、うれしいことにリーグが僕のすべてになったが、それは自分の置かれた環境のおかげであり、監督、コーチ、OBの存在が大きい。森下監督の言葉を盲目的に信じて練習し、弱くてなかなか信頼が得られず、見返してやりたいとの気持ちも力にした。リーグで浅野(芝浦工業大学)との緊迫した試合の中僕がミスをした時、五月女コーチは、自分のプレーをした結果だったからか「よおし、それでいいぞ三壁」と会場中に響き渡る声で応援してくださり、力が湧き彼に勝てた。諏訪コーチには試合後いつも激励の言葉を頂いた。練習ではいつも来てくれる茂木コーチの球を必死で追った。そしてあの1年の秋リーグでの森下監督の配慮。多くのOBにお世話になり強くなれた。この感謝の気持ちを忘れないようにしたい。

引退して少ししかたっていないが、振り返ってみるとその度に、あんなことやこんなことと学べたことが出てくるのに驚き、うれしく思っている。部で学んだことを社会人になって活かし、また多くのことを学んでいきたい。そしてこれからもバドミントンを通じて一流を目指し自分を磨いていきたい。

平成 14 年卒 金丸敦

全ての苦難の始まりは、1年の5月頃、性格と見通しの甘さに起因していたのだ。当然当時は気付くはずもない。

「金丸は主務決定だな・・・」

今ならこの言葉をそのまま聞き流すことはないだろう。当時はむしろ光栄だ、自分はそれに耐えようと考えていた。まだ苦難の道に歩みを進めてしまっていることは分からなかった・・・。

5月の下旬で実質同期の部員が揃う。我々の同期は実際、5月下旬以降で入部したのは一人だけだった。同期は最後まで残った辻、三壁をはじめ、物事を緻密にすすめ、規律を厳格に守る者はいなかった。どちらかといえば、流れで何となく行い、自分の好きなようにやりたいタイプばかりだ。文句も少なくない。自分を棚に上げているようだがそうではない。私もできればそうしたい人間の一人だ。だが、自画自賛を敢えておかせば私は他の者よりも周りがよく見えた。つまり、体育会というもの、体育会に敢えて入ったこと、先輩が考えることなどに思いがいったので、他の者がしっかりとやらないのなら私がしっかりとしようと考えたのである。大変だった。もっとしっかりとした者がいれば私がやらずに済んだのにとしばしば考えた。



私は徹底して物事を行う主義である。いやむしろ、all or nothing を座右の銘としているといった方が分かりやすいかもしれない。ともあれ、しっかりとやると決めた以上なるべく、厳しく、そう他人にも自分にも厳しくしようとした(無論、自分には甘かったであろうことは私が完璧な人間でない以上、予想もつき、反省するところでもある)。その結果、1,2年の頃は同期とよく喧嘩した。後から見れば、

その喧嘩の積み重ねがお互いの理解を深め(お互いを受け入れるということだけでなく、お互いに絶対に受け入れられない部分を認識するという意味もあった)、3,4年のときに上手く連携して部を運営することができたと思う。また、おかしい気もするが、しっかりすると決めた以上、不満や改善すべき点を全て上級生に伝えた。厳しくする以上、誠実にすることだけが自分の、ともすれば行き過ぎる、分をこえる行為を正当化できると思った。だから、雑用だけではなくて、部活に関する全てに厳しくしようと思い、また、影での不平や不満は納得がいかなかったので、同期の不平不満は同期全員の意見として先輩に告げた。そういうわけで、1,2年の頃は、同期に対しては、正論をふりかざし、先輩の顔色をうかがう嫌な奴と思われるのではないかと思い、先輩に対しては、口達者で文句ばかり言う嫌な後輩と思われるのではないかと思っていた。実際、同期とも先輩とも折り合いがいいとは言えなかった。ある意味孤独とも言えるその状況を、仕事面での誠実さと結果を求めることで正当化し、気にしないようにしていた。

本当の苦難はそれからだった。2年になると後輩の面倒も見なければならない。しかし、困ったときに頼れるはずの先輩はほとんどいないのである。しかも、下の代まで人数を減らしてしまうと部の存続に関わるので、一人もやめさせることはできない。一見した印象では厳しくすればやめてしまいそうだった。だから規律を厳しくすることはできなかった。我々が2年になるまでに、体育会の悪い部分はほとんど全て切り捨てて来たはずである。しかし、その甘くなつたはずの規則、つまりほとんど常識と言ってさし支えないものでも守れない。なぜか。理由は分からなかった。しかし、バドミントン部の存続と体育会としての在り方との間で我々はどうすることもできなかったのである。その状況は、我々のような人数の少ない苦勞をさせないという目的から二つ下、三つ下の代まで変えられなかった。人数を確保して部を存続させても体育会としての要素が薄ければ意味がないし、体育会として十分な要素を持っていたとしても部員がいなければ意味はない。究極のジレンマだった。

まだ苦難はあった。慶応義塾体育会も過渡期にあつて、先輩から引き継ぎをした知識はほとんど役に立たなかった。先輩は全く悪くないのだが過渡期の不幸である。事務手続きの変更、用紙の変更、大学側のチェックの強化、体育会への風当たりの悪化。慶応義塾体育会としても大変な時期だった。

苦勞ばかりを書き連ねてしまったが、実際には先輩方より苦勞したところがあるとすれば、ただ2年間主務をやったということだけであり、それも前例のあるところである。苦勞を認めてほしいのではない。これだけの苦勞を学生の内にしてしまったということは、これからの人生に大きなプラスであるだろうということである。特に、2年間務めるということは、経験を一過性のものではなく自分のものにすることができるということ、馴化の恐怖を今のうちから知ることができるという利点がある。

この苦難の道を踏破した経験は社会に出てから、必ずや役に立つと信じるものである。いや、「苦勞は買ってでもしろ」ということわざをこの世の真理と信じたい。全てをいい思い出とするために、笑って思い出せるように。しかし、やはり最大に苦難はバドミントンに集中できなかったことかもしれない。いや、これもバドミントンの尊さを、楽しさを思い知ることができたではないか、などといいながらこの暗い文章を笑い飛ばして結びたいと思う。

